日本ジュニア室内陸上大阪大会

（2／8･9 大阪城ホール）RESULTS

中学女子６０m	山本　祐莉	８秒１４		
中学女子６０mH	村上　瑞季	８秒８８	＜決勝＞	８秒７９　優勝

朝から大変慌ただしい一日となった。全国的に寒波到来。関東地方も積雪に見舞われ交通マヒで大混乱となったこの日。大阪の平野部でも積雪が記録されたところもあったようです。茨木市では深夜未明から降り出した雪が早朝にはみぞれまじりの雨となっていた。今日は万博記念競技場発着、万博自然公園内折り返しで茨木市民駅伝競走がおこなわれる日であった。この大会の総務である自分は、日本ジュニア室内陸上大阪大会に出場する２名の選手の引率よりも、この駅伝大会を優先しなければならない事情があった。山本祐莉と村上瑞季は夏の全国大会、秋のジュニアオリンピックもすでに経験済みで、山本にいたっては２年生のときからこの室内陸上に出場していて場慣れしている選手でもある。前日の大阪城ホールの開放練習にも２人だけで参加、今朝からはまったく別行動で２人で大阪城ホールに向かっている。駅伝大会の後片付けが終わるのが、およそ２時３０分頃。もし予選を通過して決勝に進出したら、すぐに大阪城ホールに向かう段取りでいた。朝のうちに予選がある２人は、予選が終わったら、必ず連絡を入れるように言い渡していた。

茨木市民駅伝には東雲中の伝統として中長パート以外の選手も全員が出場する駅伝となる。東雲は男女あわせて計１２チームがたすきをつなぐことになっていた。選手たちは競技場に着いたら、みぞれまじりの雨の中、コーン設営や中継所まわりやマラソンゲート付近のレイアウト設定、テント設営などの仕事にとりかかる。タータントラックは積雪ではないが、みぞれがシャーベット状になっていた。朝からレーキを持って、このシャーベットを取り去る作業にも精を出していた。カッパを着用してもウエアは濡れ、手は凍え、そして足先はまったく感覚がなくなってしまう。そんな状況下で準備をして、さらにはレースでたすきをつなぐ選手たち。当たり前のこととは言え、よくがんばったと思う。途中、６０m予選が終わった山本から電話があり予選落ちしたことがわかる。しばらくして、大阪中体連強化委員長の枚方長尾中の島津先生からメールが入っていることに気づいた。島津先生は大阪城ホールで審判をしていて、２人の面倒を見てもらうようにお願いしていた

のだ。『村上８秒８８で決勝進出。８秒８２から８秒９１までが決勝進出で接戦です！』という内容であった。その後しばらくして、村上本人から連絡が入った。全体で４番目の記録で決勝進出を果たしたと言う。あわただしく駅伝の後片付けをして、ミーティングを済ませた。一刻も早く大阪城ホールに着きたいというはやる気持ちを抱えながら、JR 茨木駅から電車に飛び乗った。「私たちも応援に行ってもいいですか？」と、申し出た７人のあどけない１年女子部員も一緒である。体は凍え、靴下も濡れて足も冷たくなっているはずなのに、彼女らのその素直さがいじらしく、選手としてとてもかわいかった。

３時１５分過ぎに大阪城ホールに着いた。正面玄関で受け付けをしている島津先生に会ってお礼を言った。「１台目はややロスがあったけれど、３台目以降はかなりスピードがあがっていましたよ」と、予選のレースの様子を教えてくださいました。そのあと、１年生の７人を観客席に座らせて、自分はすぐにウォーミングアップ場に向かった。４時にコールがあるので、必ずそこに村上がいるはずなのだ。アップ場と言っても、３０ｍもダッシュしたら、すぐに壁にぶつかるような室内の小アリーナである。そこに入ると、村上が先に見つけてすぐに「先生！」と言って、笑顔で近づいて来た。予選のレースの様子を本人に確認すると、「１台目で浮いてしまいました」と言う。「タータンの室内のボードはやっぱり少し勝手が違うみたいです。」１台目の踏み切りが近くなってしまって、少しブレーキがかかってロスしてしまうらしい。その後は何もアドバイスすることなく、彼女のアップを静かに見守っていた。このアップ場には決勝進出者しかいない。それぞれがてっぺんを目指して、集中しながら動きづくりをしたり、ストレッチを繰り返したりしている。いつも全国の大舞台で目にする光景である。

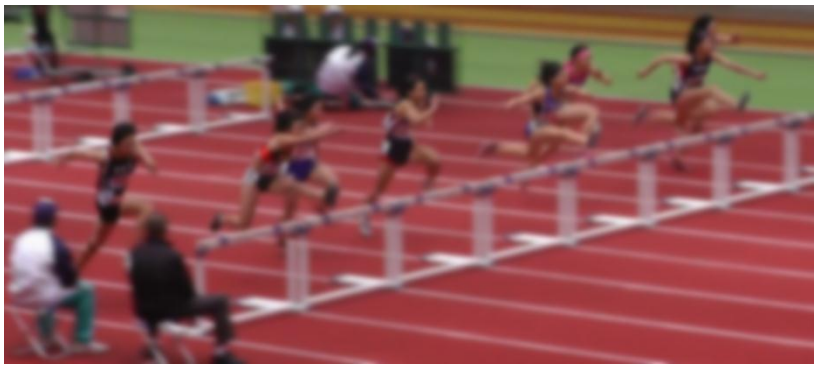
夏の全中、秋のジュニアオリンピックの有力選手がこの大会にも参加している。今年で言えば、夏は名古屋、秋は横浜、そして冬はこの大阪。村上も何人かの選手と再会を果たし旧交を温め合ったと言う。村上はジュニアオリンピックで５番目の記録で決勝進出したのだが、決勝では８位という結果になっている。今回は４番目での決勝、何とか表彰台にのぼらせたいと考えた。選手招集所に送り出すときに、村上と２人でレースのイメージを話し合った。「６０ｍは１００ｍよりも短いので、どうしても１台目のアプローチに神経を使ってしまいがちになる。だけど、そのことよりも、３台目以降のハードルをスピードがどんどん上がるようなイメージで４台目、５台目を越えていこう。１台目のアプローチが遅れてもいいから、１台目の板の上をスピードがあがって通過できるようにしよう。あとは自分のレーンに集中すること」と伝えた。「はい！お願いします!!」といつもの力強い返事。肩をポンと叩いて、選手招集所へ送りだしてやった。

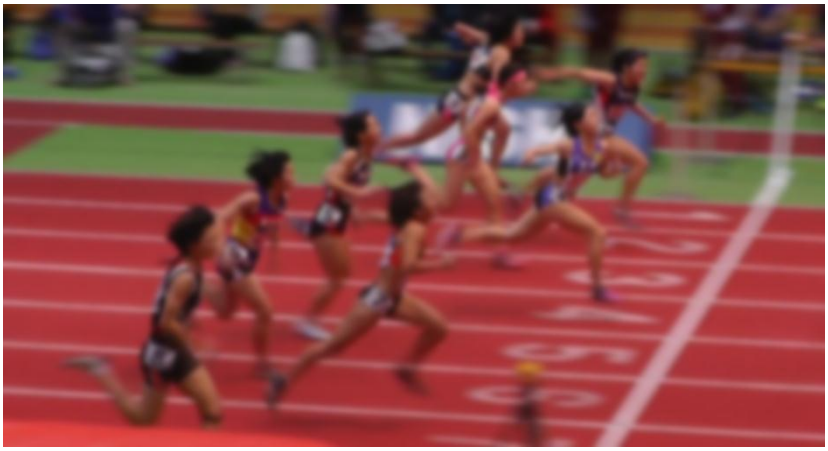
４時１０分頃、村上ら８人のファイナリストがアリーナに現れた。走路にはすでにきれいにハードルが並べてあって、選手がアプローチ練習を繰り返すことが

できる状態になっていた。直走路の横ではオープン種目である男子棒高跳びで日本記録者保持者の澤野大地選手の競技が終わったところあった。その反対側では、つい先ほどまでジュニア男子三段跳びがおこなわれ、室内ジュニア日本新記録誕生で盛り上がっていた。その合間にアプローチ練習する村上の姿を目で追った。１回目のアプローチ練習ではやや抜き足がおくれるタイミングであった。２回目のアプローチ練習ではそのあたりが修正されてスピードに乗るハードリングができていた。そして、３回目のアプローチ練習では１台目の入りも申し分なく、さらにはスピードがどんどん上がるハードリングができていた。「村上OK！それでいいぞ!!」と客席から声をかけると、村上はこちらを見て頷いて、両手を後ろにして一礼した。

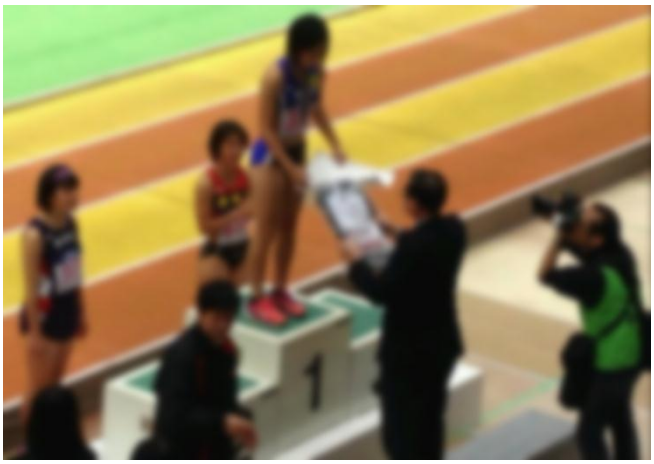
　ファンファーレが鳴った。１６時２５分、中学女子６０mハードル決勝の時間である。村上は４レーン。その隣の５レーンが８秒８２の記録で予選をトップ通過した千葉・秀明八千代中の安田選手。３レーンの三重・多気中の櫻本選手は夏の全中３位の選手で、秋のジュニアオリンピックの決勝では村上の隣の８レーンであった。２レーンの東京 KMC 陸上クラブの八尋選手。この選手も夏の全中６位。７レーンは同じ大阪の赤坂台中の２年生川岸選手。ジュニアオリンピックでは準決勝まで進んだ力のある選手。８レーンの北海道木古内中の岡村選手はジュニアオリンピック B クラス４位。不思議と村上と縁がある熊本・東町中の濱岡選手（ジュニアオリンピックでは予選、準決勝、決勝と同走している。６位入賞の選手である。）は予選でまたもや村上と同走。わずか１００分の１秒の僅差で惜しくも予選敗退となっていた。

　「ON　YOUR　MARKS」スターターの低い声に場内が静まりかえる。固唾を呑んで見守る１年生の７人の選手。スターターのピストルが鳴ると、８人の選手がきれいに飛び出した。村上が抜群の好スタートを切った。１台目をスピード良く真っ先に越えていった。「よっしゃー！」と、心の中でガッツポーズ。インターバルもピッチを緩めず、まるでハードルを越えていくごとにスピードがあがるように、２台目、３台目、４台目と越えていった。最終ハードルも真っ先に飛び越えている。接戦である。最終ハードルからフィニッシュラインまでがずいぶん長く感じられた。体を前にあずけるようにフィニッシュラインを越えた。そのまま８人の選手が次々と勢い良くフィニッシュラインの向こうにあるセーフティマットにぶつかっていった。「勝っ





た!?」７人の選手たちと顔を見合わせた。速報のデジタルタイマーは『８:８０』で止まっていて、レーン番号の表示がない。村上がフィニッシュラインまで戻って来て、心配そうに電光のスコアボードを見上げる。正式記録が発表された。『１３７９（ナンバーカード）　村上瑞季　大阪東雲　８：７９』その表示を見た途端、村上は両手で顔を覆って泣き出した。客席では「やった～！日本一やー!!」と、大騒ぎになった。

感動の表彰セレモニー。笑顔満面の村上。東雲ブルーのセパレートユニフォーム姿の村上が表彰台のてっぺんにあがった。「日本一。おめでとう～！」の声が飛び交う。晴れやかな彼女の姿を目に焼きつけようと必死で心でシャッターを押した。秋のジュニアオリンピックでファイナリストになった実績を持つ村上ではあるが、信じられないことに、彼女の中学陸上の競技生活で初の優勝となったのだ。大阪のハードルのレベルが高く、さらに三島地区がその中でもレベルが高く、茨木市だけでハードルで夏の全中に出場した選手が３人もいたのだ。だから、彼女は地区大会はおろか、市民大会でも優勝することはなかったのだ。準決勝までいい走りを見せていても、決勝ではうまくレースを組み立てることができなかったことも度々あった。２年生までに大舞台の経験がなかったことが、その一因であった。彼女は大阪中体連の強化選手にもなれなかった。その彼女が中学校生活最後のチャンピオンシップの大会で、予選からさらに記録をあげて優勝したことが感慨深い。

これまでに何度も同じ話をしているが、彼女は１年のリレーメンバーにも入れなかったくらいの無名選手。０９年大分全中に出場、高校で日本一、世界ユース日本代表になった田中美調もはじめは１００ｍ１６秒台後半の選手であった。その『田中美調物語』のストーリーを目を輝かせて聞いていたのが村上であった。今度は『村上瑞季物語』をたくさんの後輩たちが目を輝かせて聞くことでしょう。今回応援に駆けつけた１年生の７人は日本一を実際に観たのだ。この中から、全国大会に行くような選手が必ず育つはずだ。夢を持つことからすべてが始まる中学陸上の魅力に勇気をもらっている。